

大学体育における教育課程に関する研究 —とくにコンテンポラリースポーツの新たな試みについて—

佐藤 勝弘 (保健体育・スポーツ科学講座、保健体育科教育学)

高橋 一栄 (新潟医療福祉大学・保健体育科教育学)

西原 康行 (新潟医療福祉大学・スポーツ社会学)

大学体育、とくに大学教養体育は危機の時代を迎えている。その原因は多岐に渡っているが、①安易なシーズン・スポーツの導入、②Do Sports から See Sports へなど、平常の授業を軽視した取り組みが大きな原因となっていると思われる。大学体育は、小、中、高等学校までの体育を凝縮して、より一層運動の楽しさを体感させることが大切であると、私たちは考える。そのためには、これまで行われてきた「モダンスポーツ」(競い合いを中心としたスポーツ)だけでなく、「コンテンポラリースポーツ」(自分自身や仲間を知り、自然を中心としたスポーツ)の魅力を感じさせることが大切である。21世紀の医療福祉の分野で活躍する人材を育てるために、大学体育の教育課程を改善し、より多様なスポーツの魅力に触れさせることを目的とした初年度1年間の教育課程の実践を報告する。

〔キーワード〕 大学教養体育、モダンスポーツ、コンテンポラリースポーツ、教育課程、カラーセラピー、

1. 緒言 (目的)

近代スポーツ(以下モダンスポーツという)は、1800年代前半よりイギリスを中心に発達したものである。多木浩二は、近代スポーツを表現するにあたり、ベルナル・ジレを取り上げ、「その多くは貴族の余暇や祝祭性を持ちながら、人に競り勝つ特性を中心に発展してきた。」¹⁾と述べている。それは現在においても、4年に一度開催される近代オリンピックに継承されてきているのである。

モダンスポーツは、現在もわが国の小学校・中学校・高等学校等の体育授業で中心的に扱われてきている。具体的には既成のルールにのっとったサッカー、バスケットボール、バレーボール、陸上競技等に代表されるように、すべて競い合いが中心となっている。確かに、競い合いは本質的に人を夢中にさせる要素も持っているが、そこには両刃の剣としての危険性もあり、競い合いが過ぎるあまり体育嫌いになる場合も見受けられる。

本研究における試みは、モダンスポーツに、コンテンポラリースポーツを加えるものである。具体的内容として、一つめはメルロ・ポンティに代表され

る主観的身体と客観的身体、すなわち、自らの身体を客観的に捉えるまなざしの豊かな経験(身体運動)が、他者の身体を自らの身体と同じ感覚で捉えることにより、他者の痛みを把握し、いたわる気持ちが生まれることを大切にしたいという言説、鷺田清一の「何か少年や少女の事件が起こるたびに、心のケアや心の教育がどうのといった声があがるが、私はすぐにはそういう発想は取れない。(中略)何か、身体が憶えた智恵や想像力、身体で学んだ判断を信じたいのだ。」²⁾という言説、また、西原の、スポーツ科学における現象学的パラダイムの重要性を指摘した「身体化するモノ」³⁾の言説から、自らの身体への気づきと関心が自らの身体への配慮を生み出し、それが他者の身体への気づきと関心を生み出し、さらに、他者の身体への配慮すなわち、心の目で他者と触れ合う感覚を生み出すという現象学的パラダイムによる視点を取り入れていこうということである。

二つめは、機械化・能率化をめざしてきた20世紀における近代社会が、いつのまにか欠落させてきたものとして、人と自然とのかかわりに着目し、人も自然の一部であるという気づきを促し、自然と共

生する中で、自分自身を深く見つめることにより、周りの仲間や環境を大切にすることを育てたいと考えている。

そこで本研究では、教育課程にモダンスポーツにくわえてコンテンポラリースポーツを取り入れることにより、本学学生のこれまでの体育に対する意識がどのように変化するか、さらに、どのような資質を育成することができるかについて、継続的に研究することを目的としている。

2. 研究内容

本研究では(1)基本的な教育課程をどのように構想するか(2)具体的にどのような教材をどう配置するかを主な研究内容としている。

(1) 基本的な教育課程の構想

モダンスポーツにくわえ、コンテンポラリースポーツを取り入れることを意図し、つぎの3点を、本学体育の基本的な構想として位置づける。

- ①典型的な教材をもとに、小・中・高等学校までの学び方を再確認する活動を通して運動とのかかわり方を理解し、生涯続けることのできるスポーツを身につける。
- ②「フィジカル・フィットネス」や「ストレッチング」を体験することにより、自分自身の心と身体の気づきを通して、周りの人やものへの思いやりの心を育てる。
- ③自然とふれあう活動を体感することを通して、四季の微妙な変化や自然の移り変わりなどを察知する鋭敏な感性を養い、自然や人と共生する力を育てる。

本学体育では、これら三つを融合することが、すなわちコンテンポラリースポーツ教育にアプローチすると考えている。

(2) 教材の開発とその配置

①典型的な教材の開発

前期授業開始時オリエンテーション時に、1年次全学生 322 名に、小学校・中学校・高等学校までの運動経験調査(24項目)を実施した。その調査によると、これまでの運動経験で最も多かったものにバレーボールがあげられた。(97.8%が履修済) 本学の体育施設の実態及びこれまでの経験を考慮して、バレーボールを典型教材とし

て取り上げることにした。そのコートやルールも、チャンピオンスポーツに固執せず、6面あるバドミントンコートを利用し、3対3の人数によりだれでもボールに触れることができるようルールにも工夫を加えた。⁴⁾ボールも最初からオフィシャルなものを使わず、ソフトバレーボールを使用しゲームの高まりに応じてボールを変えるなど、だれもが楽しめるよう配慮した。

②その他の教材の配置とその意図

1 学年前期で、ソフトバレーボールにより、運動とのかかわり方を学び、後期では、その力を活用して、グループで、また、個人で、それ以外の運動とのかかわり、生涯続けることのできるスポーツを獲得させたいと考えている。体育施設と教員の定数から、屋内施設では、バドミントン、テーブルテニス、バスケットボール、ソフトテニス、屋外施設では、テニス、サッカー、ゴルフから選択させ、後期前半の7時間で一つのスポーツを、後半7時間で他のスポーツを経験させるよう意図している。

2 年次、「スポーツ実践Ⅰ・Ⅱ」では、障害者や高齢者が気軽にできるニュースポーツ、ソフトバドミントンを典型的な教材として前半の7時間に位置づけ、主体的な学習の仕方をさらに洗練させ、後半の7時間はフライングデスクを経験し、その教材化を目指している。3 年次「スポーツ支援Ⅰ・Ⅱ」では、さらにその幅を広げ、障害者や高齢者が中心になって行なうスポーツ、たとえばチェア・バスケットボールやチェア・スキーの体験と新たな教材の開発を考えている。

③フィジカルフィットネス及びストレッチング
自分自身の身体の気づき、そして他人への配慮を考えると、フィジカル・フィットネス及びストレッチングは教材としてとくに大切である。この二つについては、授業前半では教師が中心になって、機器の使い方、基本的な行ない方を身に付けさせ、徐々に自分でできるように意図している。この二つについては、1年から3年までの授業すべてに位置づけ、少しずつ日常化ができるよう意図している。

④自然とふれあう活動の設定

本学体育の最も根幹をなす、自然体験活動については、1年から3年まで全ての学年に位置づけ、少しずつ自然とふれあう機会を増やしていこうと考えている。1年前期では、授業クラスごとに終了段階で、近隣公的施設「海辺の森」での炊飯宿泊活動を実施し、体育テキスト「センス・オブ・ワンダー」の輪読を行い、自然を深く見つめさせようと意図している。この輪読は、1年前期のレポート作成につながり、レイチェル・カーソンの自然に対する考え方について、海辺の森宿泊活動をもとに、自分の経験と反映

させて自然の大切さを記述させることにしている。1年後期では、集中授業として、「銀山平・尾瀬トレッキング」または「スキー実習」(各2泊3日)を選択し、さらに自然とのかかわりを深く体験させようとしている。年次3年次についても、選択肢をさらに広げ、カヌーやスキューバ・ダイビングなどを取り入れることにより、いっそう自然とのかかわる時間と場を保障してやりたいと考えている。これらの内容を図示すると次のようになる。

名称	1年次(前期必修・後期選択) スポーツ・健康 I・II	2年次(必修) スポーツ実践 I・II	3年次(必修) スポーツ支援 I・II
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高校の学び方の確認 ・典型的な教材による運動へのアプローチ、フィットネス、ストレッチング 	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースポーツ典型教材による運動へのアプローチ ・ニュースポーツ(フライングデスク)教材化 ・種目選択による自主的学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・チェアバスケット、チェアサッカーなどの学習 ・チェアスポーツの教材化
学習内容	3人制ソフトバレーボール ストレッチング フィジカルフィットネス ネット型スポーツ(バドミントン・テニス) フィールド型スポーツ(ゴルフ・サッカー)	ストレッチング フィジカルフィットネス	ニュースポーツ1・2(ソフトバド・フライングデスクなど) ストレッチング フィジカルフィットネス ニュースポーツ3・4(チェアバスケット・チェアサッカー)
実習	キャンプ宿泊実習(1年) トレッキング・スキー実習(1年) カヌー実習(2年) チェアスキー(3年)		

図1 新潟医療福祉大学体育の教育課程(三重枠は今回の報告部分)

⑤単元における時間配分

単元時間	14 から 15 時間
------	-------------

・単元内の時間配分

1 学年前期 1～3 時間	(主教材ソフトバレーボール) ランニング・ストレッチング・ フィジカルフィットネス説明 及びバレーボール基礎学習
4～14 時間	ランニング・ストレッチ ソフトバレーボール
1 学年後期 1～7 時間	(主教材選択種目・2 種目選択) 選択種目 1 自主学习
8～14 時間	選択種目 2 自主学习

1 授業時間	90 分
1 授業時間の内容	
ランニング	10 分
ストレッチング	10～15 分
フィジカルフィットネス	適宜
主教材の学習	60 分

⑥授業における教師の働きかけと指導方法

小学校、中学校、高等学校における学習の進め方をベースに、自主的・主体的な学習を成立させることが大切だと考える。その資質が、生涯に渡って運動に親しみ、今後対象とする障害者や高齢者の運動生活をクリエイトすることにつながる。このような考え方から、教師は次の様な姿勢で授業を構築していく。

- ・学習者を前面に出し、教師は円滑な学習をサポートする支援者としての立場をとる
- ・ストレッチング、フィジカルフィットネスなど、初めて経験する内容については、その基礎や基本を確実に教え、定着を図る
- ・各時間終了後、授業に関する簡単なアンケートを実施し、授業改善や修正に努める

本報告では、1 学年前期後期の実践、すなわち 1 年前期必修授業 (3 人制のソフトバレーボール)、1 年後期選択授業及びその集中種目である、トレーニング、スキー実習について、本学の学生の授

業前と授業後における意識の変化を報告する。

3 研究方法

これまで教育現場での研究は、「理論に実践を当てはめる」いわゆる「Theory into Practice」という考え方が主流であった。しかし、新しい教育研究の動向が、「実践の中にこそ理論がある」という考え方、すなわち「Theory in Practice」へと大きく変わりつつある。⁵⁾ 筆者らは、「大学教師も、臨床の場に有って、研究者であるばかりでなく教える人であり、ともに学ぶ人である」という立場で、日常の授業をまず大切にしつつ、その授業を理論化できないかという考えに立ち授業実践を行ってきている。

とくに今回は、授業後における抽出学生の体育に対する意識の変化を中心に報告するため、比較研究など統計的な手法が取れないことを、あらかじめ付言しておく。

(1) 調査方法

1 年生抽出生 (164 名) による、前期・後期各単元終了時における質問紙調査

(2) 調査項目

ア、体育授業の色モデルによる比較

- ・小学校、中学校、高等学校までの色モデルとその理由
- ・本学授業終了後の色モデルとその理由

○「カラーセラピー」⁶⁾ を参考にして、色彩基準をもとに①黒から⑳無色まで具体的に色を提示し、小・中・高校までの色については、「最も印象に残る授業」を、本学では「授業終了時」の色をその理由とともに記述させた

*** 体育授業を色で表現させようと考えた意図は、文章表現以上に直感的・感覚的に体育授業についての比較が可能と考えたからである。**

イ、本学授業の充実度について

- ・授業終了時に、充実度を 1 から 100%まで、数値で記入させ、その理由も自由記述させた

ウ、教材の有用性について

- ・3 人制ソフトバレーボール、ストレッチ

ング、フィジカルフィットネス、トレック
 キング実習、スキー実習

*有効と考える教材について複数選択させ、
 その理由も記述させた

エ、教師の姿勢について

- ・授業における支援を中心の働きかけ
- ・受容的、安定感のある学生への対応
- ・主体的学習のための手立ての有効性など

(3) 対象者

新潟医療福祉大学1学年抽出学生 164名
 (回収率100%) 前期のみ履修者—64名
 前後期履修者—100名

(4) 調査期日

平成13年7月16日—19日(授業終了時)
 平成13年1月10日—15日(授業終了時)

4. 結果と考察

(1) 体育授業の色の变化について

本研究において、体育授業の分析にあたっては「カラーセラピー」の手法を用いることにした。すなわち「カラーセラピー」の分析によると、色彩学における色の分類は二つに分けられる。一つは有彩色であり、もう一つは無彩色である。有彩色は、「色味をもつ」全ての色であり、無彩色は、「色味をもたない」色である。有彩色は、赤、青、緑などが上げられ、無彩色は、黒、白、灰色、などがあげられる。

さらに色は、互いに独立してもっている三つの属性があり、これを「色の三属性」と呼んでいる。すなわち「色相」「明度」「彩度」の三属性であり、色相は、「色味」を表し、「明度」は明るさの度合いを表し、「彩度」は鮮やかさの度合いを表す。

有彩色や無彩色及び色の基本的三属性をまとめると下の表のようになる。

表1 色の基本的性質

	色 相	明 度	彩 度
彩 色	○	○	○
無彩色	×	○	×

有彩色の中には色相、明度、彩度があり、無彩色には、明度のみが存在する。

「カラー・セラピー」における人間の心理と色との関係を見ると、「有彩色は肯定的な心理が強く働き」、「無彩色は、否定的な心理が強く働く」と定義づけている。

これらの事実及び表出された色の背景となる記述の内容から、本学における体育授業については、「有彩色(赤、青、緑など)は、体育授業を肯定的にとらえている色」とし、「無彩色(黒、灰色など)は、体育授業を否定的にとらえている色」とした。また有彩色の中で、とくに明度の低い色、たとえば「茶」「黄土」「紫」「群青」は、その記述内容が全て否定的事実であったことから、無彩色と同じ範疇に入れることにした。あわせて有彩色の中に肯定・否定の意見がある色が存在することから、それらを中間に位置付けることとした。なお、下表の下線部の色は、有彩色で否定、または否定と肯定の意味を表している。

表2 肯定・否定色基準

肯定否定の色	色 の 種 類
肯定的な色 (有彩色)	水色、黄緑、緑、 深緑、黄色、桃、 橙、赤、銀、金、 虹色
肯定・否定色 (下線は有彩色)	<u>青</u>
否定的な色(無彩色、 下線は有彩色)	黒、白、灰、 <u>茶</u> 、 <u>黄土</u> 、 <u>紫</u> 、 <u>群青</u>

すなわち、色の違いによって授業に対する肯定・否定の傾向を把握しようと考えた。また、明度は、有彩色、無彩色どちらにも存在し、明度の低い色に否定的な意見が見られることから、明度についても考慮することとした。なお、有彩色の彩度(鮮やかさ)の違いにより肯定の度合いの違いを把握できると考えられたが、今年度は色相と明度について考察を加えることにした。高校までの体育授業の色と、本学体育授業経験後の色の变化は図2のようになる。

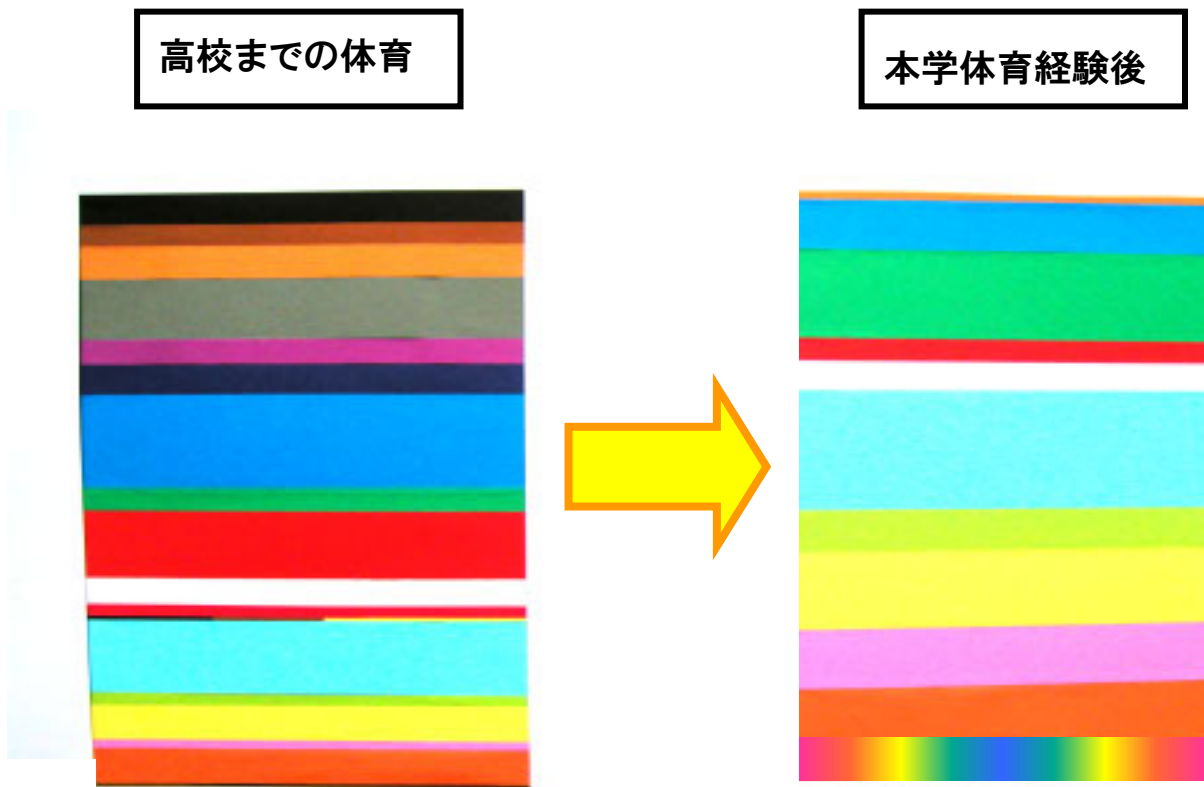


図2 体育授業終了後の色の変化

図2で示したように「黒」「灰」「茶」「黄土」「紫」「群青」などの色が減少し、有彩色で、とくに明度の高い「水」「黄緑」「緑」「黄」「桃」「橙」「虹」などが増加したことが、図2「本学体育授業終了後

の色の変化」を顕著にしているといえる。

これらの背景となる記述内容について、マイナス要因とプラス要因の主なもの及びその高校までと本学経験後の変化は次の図4、図5のようになる。

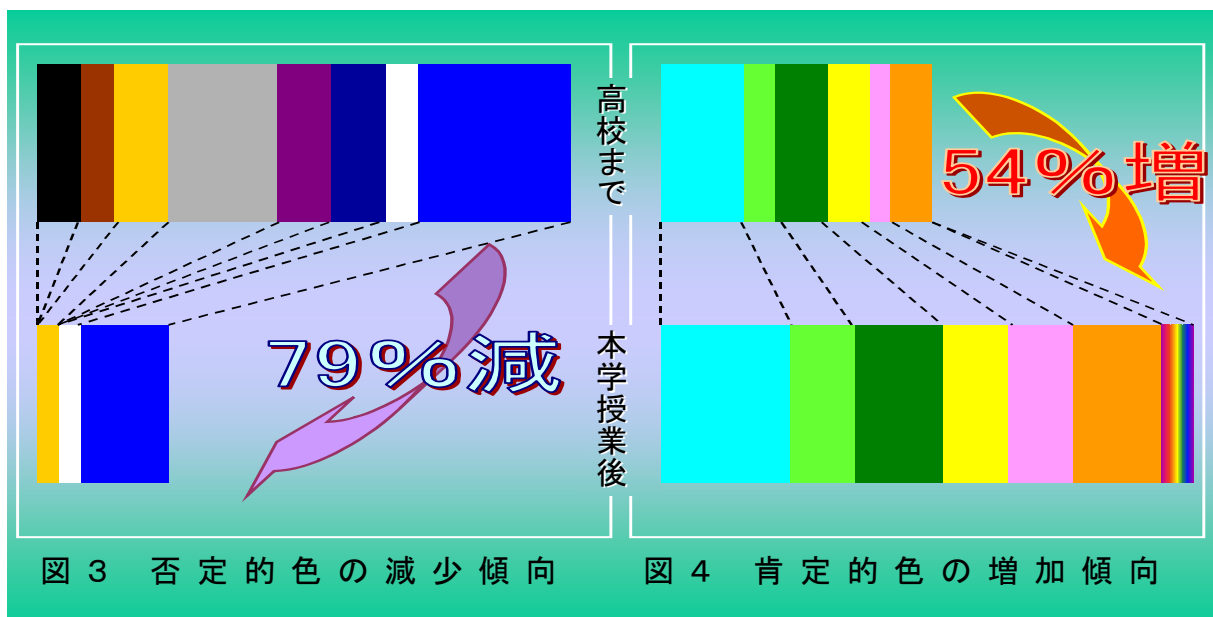


図3 否定的色の減少傾向

図4 肯定的色の増加傾向

すなわち、無彩色の「黒」「白」「灰」を中心に、有彩色で、否定的な色である「茶」「黄土」「紫」「群青」などが減少し、「青」は肯定・否定両方の意見のうち、否定的意見が減少し、それらの色の減少の割合は79%に達している。

上記とは対比的に、有彩色で、肯定的色である「水」「黄緑」「緑」「黄」「桃」「虹」などの色が増加し、それらの増加の割合は、54%となっている。

(2) 記述内容におけるマイナス要因とその変化

マイナス要因の色の変化を裏付ける記述内容をみると、図5のようになる。

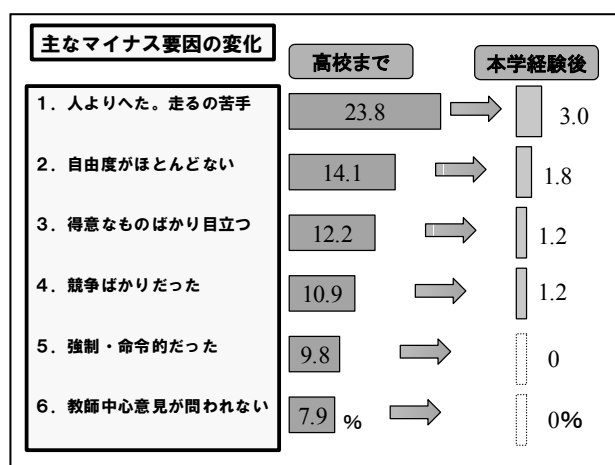


図5 主なマイナス要因記述の変化

「人よりへただから」「得意なものばかりが目立つ」「競争ばかりだったから」などの、モダンスポーツのもつ、競技的な要因と、「自由度がない」「強制・命令的だったから」「教師中心で学習者の意見が問われない」など、教師の授業に対する姿勢、学習者への対応の仕方が、その変化の大きな要因となっているといえる。

(3) 記述内容におけるプラス要因とその変化

プラス要因の色の変化を裏付ける記述内容をみると、図6のようになる。

「ストレッチング」「フィジカルフィットネス」などの新しい教材の開発及び「ソフトバレーボール」など、従来の競技的スポーツの性格を越えた、誰でも楽しめる教材の開発・提示がプラス要因の大きなウエイトを占めている。

あわせて本学の最も中心的なコンセプトである

「自然中心のプログラムに魅力を感じた」という意見が34.2%にも上っており、コンテンポラリースポーツの開発が、大きなポイントとなっているといえることができる。

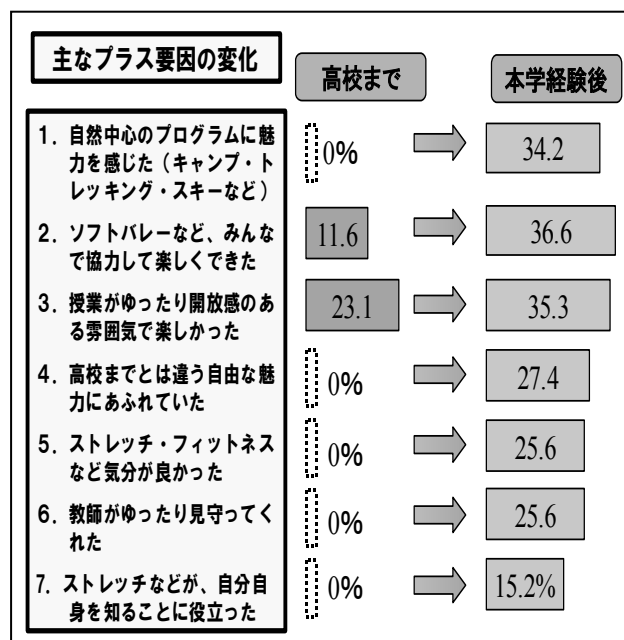


図6 主なプラス要因記述の変化

(4) 前期・後期履修別充実度の比較

本学の体育は、医療福祉系の大学という特長から、1学年から3学年まで教育課程が組まれている。その中で、1学年後期だけは選択制としている。その主な理由は、1学年前期で身につけた運動の学び方や楽しみ方を、自ら選択した1学年後期の講座で、より主体的に習得させたいという意図からである。また、選択制として提示した場合、どの程度の学生が講座を選ぶか把握したいという願いも持っている。

このような意図で設定している1学年後期の体育講座履修率は、平成13年度には**63.8%**、平成14年度には**77.5%**となっている。国家試験を目的とした本学の過密な教育課程の中で、この選択率は私たちの予想を越えており、本学学生が体育授業にかける期待はきわめて大きいといえることができる。

このような本学の実態の中であって、後期体育を選択しなかった学生と、後期体育を選択した学生との間で、その充実度が異なるかどうかを比較すると、次の図7のようになる。

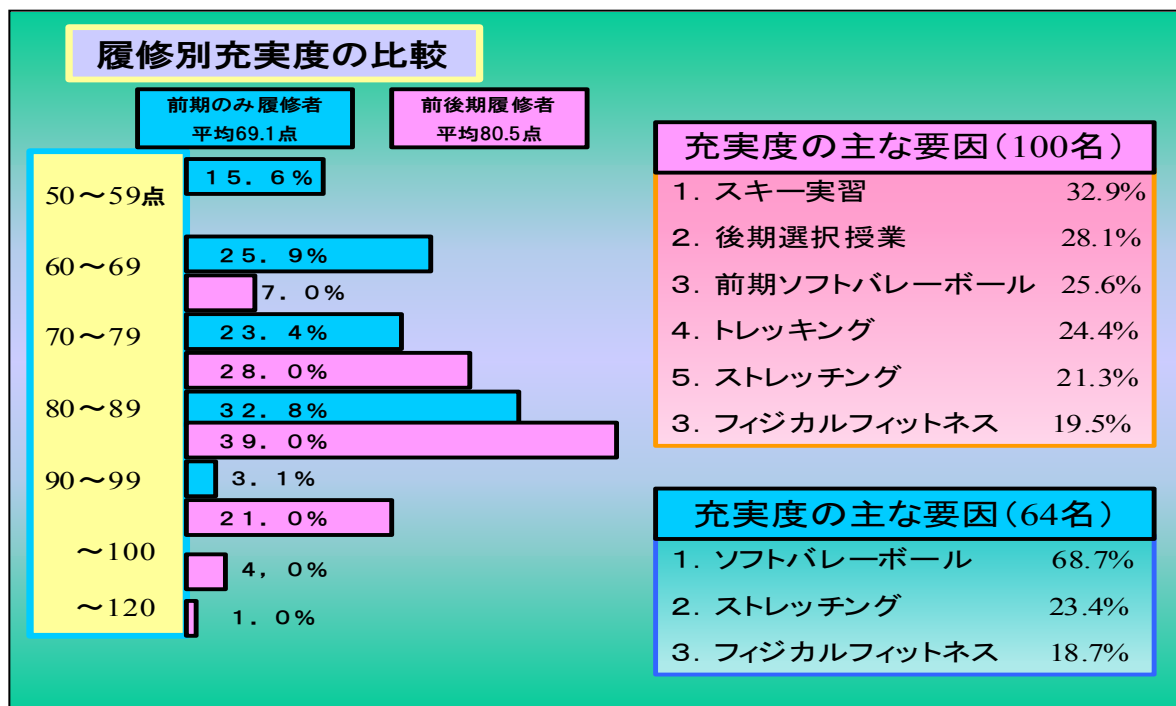


図7 前期・前後期履修別充実度の比較

1 学年体育、前期のみ履修者、前後期履修者について、その充実度と理由の記述を見ると上記のようになる。充実度は100点を満点とし、各講座履修後の充実度を点数で問いかけた。あわせてその充実度の主な要因を記述させた。

それによると、前期のみ履修者の充実度の平均は69.1点であり、前後期履修者の平均は80.5点と、その充実度に11.4点の差が表出している。

図7の左側、グラフをみると分かるように、前後期履修者は、80～89が39.0%と高く、さらに、90～99が21.0%となっており、100点満点、それ以上を合わせると、65.0%となっている。

それに比べ、前期のみ履修者は、80～89では32.8%と高くなっているが、70～79、60～69、も高く、50～59の15.6%と合わせると、上記の3つで64.9%となっており、履修別の充実度に差があることが推察される。

その主な要因は図7の右のようになっている。前後期履修者の充実度の2番目に日常の授業（後期選択授業）があげられていることから考えても、平常の授業を充実させることが大切である。

これらのことから、体育授業を継続して受講する

ことは大切であり、そのことによってより深い体育の楽しさを味わうことができる。

後期授業を履修しなかったものの理由は多岐に渡っており、一つに結論付けることはできないが、「小学校、中学校、高校までの体育授業のマイナスの経験により体育嫌いになり、そのことが原因で後期授業の履修をしなかった」という意見が多くでていたことから、1 学年前期の授業において、さらに、深く体育の楽しさや魅力を味わわせることが大切である。

5. 結語および今後の方向

本報告は、新潟医療福祉大学における大学教養体育、1 学年前期・後期実施後の教育課程についてカラーセラピーを中心に検証してきた。今後2 学年、3 学年と実践を継続しないと、正確な結論は出せないが、現段階における結語と今後の方向について簡単に述べる。

(1) コンテンポラリースポーツを、大学の教育課程の中心に位置付け、とくに日々の平常授業を充実して行い、さらに、集中授業と組み合わせて多様な楽しさを味わわせることにより、これまで経

験したことの無い運動の楽しさを味わわせることが可能になる。

(2) コンテンポラリースポーツの楽しさを十分に味わわせるためには、フィジカルフィットネス、ストレッチに加え、自然を中心とした教材を開発し、その内容や方法などに変化を加え、できるだけ多様に体験させることが必要である。

(3) 本学の体育授業を継続して行うことにより、その充実度が増加することから、選択授業においても、できるだけ多くの受講者を受け入れることができるよう教育課程を改善する必要がある。

(4) 体育の授業が、学習者の主体性・自主性を大切にし、自ら積極的に学ぶ力を育てることが必要なことから、教師は基本的なことは十分に教えながら、次第に支援者としての立場を取り、心地よいゆったりとした授業雰囲気を作ることに努め、受容的な態度で授業を行うことが大切である。

(5) これまでの実践を生かしながら、さらに、自然により深く触れることを目的にした水辺のスポーツや、本学学生が社会に出てかかわるであろう障害者スポーツ、高齢者スポーツを教材として開発し、教育課程に取り入れて、2年次3年次の教育課程について、さらに詳細にその妥当性を検証していきたい。

*本報告は、平成13年9月27日北海道大学で行われた第52回日本体育学会「体育科教育分科会」及び平成14年10月12日埼玉大学で行われた第53回日本体育学会体育科教育分科会で口頭発表した一部をまとめたものである。^{7) 8) 9)}

<注・引用文献>

- 1) 多木浩二「スポーツを考える」ちくま新書
1995, p14
- 2) 鷺田清一『悲鳴をあげる身体』PHP新書, 2000, p3
- 3) 西原康行『筑波大学研究論文集 第23巻』筑波大学, 2001, p85-p88
- 4) 高橋一栄『教師のための体育学習指導論』文久出版, 1991, p70
- 5) 佐藤学「実践的探求としての教育学—技術的

合理性に対する批判と系譜」日本教育学会『教育学研究』第63巻3号, 1996, p81

6) NAOKI MATSUSIMA「カラーセラピー・色彩学のABC」1996

7) 日本体育学会第52回大会(北海道大学)『全国大学体育連合企画シンポジウム「大学体育と評価」配布資料』, 2001,

8) 日本体育学会第52回大会(北海道大学)『体育科教育学分科会』, 2001,

9) 日本体育学会第53回大会(埼玉大学)『体育科教育学分科会』, 2002

・ 佐藤学他編著『越境する知1 身体:よみがえる』東京大学出版会, 2000,

・ レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』新潮社, 1996